

発足から名称変更までの 30 年の歩み(沿革)

この度、甲状腺外科検討会から甲状腺外科研究会へ名称が変更された機会に、本会の設立の経緯と 30 年間の発展の歴史を整理し、今後のさらなる進歩の礎としていた。

わが国において甲状腺、上皮小体の外科を専門的に扱う学術集会の必要性は早くから話題になっていたが、実現に至るまでには多少の時間を要した。1968 年(昭和 43 年)、丸田公雄(信州大外科)、瀬田孝一(岩手医大外科)、遠藤辰一郎(福島医大外科)、桑原 悟(鳥取大外科)、藤森正雄(群馬大外科)、羽田野 茂(東大外科)、江崎治夫(広島大外科)、太田邦夫(東大病理)、矢川寛一(岩手医大病理)、阿武保郎(鳥取大放射線科)、寛 弘毅(千葉大放射線科)が発起人になって、甲状腺外科検討会がようやく発足した。当時のもようを降旗力男信州大学教授(当時)は甲状腺癌取扱い規約(第 1 版)の序文に以下のごとく述べている。『甲状腺外科の研究会を作ろうという機運は、かなり昔からあったが、なかなかその機に至らなかった。ところが、1968 年 5 月、スイスのローザンヌで開かれた国際対癌連合(UICC)の Conference on Thyroid Cancer が一つの動機となり、1968 年 6 月 7 日同好の研究者が松本市に集まって発起人会を開き、甲状腺外科検討会を発足させることになった。ついで、同年 9 月 25 日第 1 回検討会(当番世話人丸田公雄教授)が開催され、大変な好評を博し、本会の発展の礎石となつた。(以下略)』

本会の発足当初の理念は、甲状腺、上皮小体の外科を専攻しているものや、これから勉強しようとする人たちが日常の臨床上の諸問題を率直に話し合い、自由に意見交換できる学術集会を設立し、わが国の甲状腺、上皮小体外科学の底辺を広げようというものであった。当時、すでに胃癌や乳癌の関係者らは研究会の名称でそれぞれの学術集会を発足させていた。しかし、本会はより多くの人たちにじみやすく、参加しやすいようにとの配慮から、故丸田公雄 初代会長の肝煎りで甲状腺外科検討会と命名された。わが国には甲状腺外科を専門的に扱う学会や研究会がなかったこともあって、会員および学術集会への参加者は年毎に増加し、今日の盛況をみると至った。ちなみに発足時の参加施設数および発表演題数はいずれも 50 前後であったが、第 30 回には施設数 368、演題数は 168 に達した。発表内容を当時の講演抄録からふりかえると、当初はほとんどが甲状腺、上皮小体外科の臨床的な問題を取り上げたものであり、まさしく設立の趣旨に合致するものであった。その後、会員諸氏のご努力のおかげで、本会は別表に記したごとく年毎に充実し、これに平行して日本外科学会における甲状腺、上皮小体外科に関する演題数も急速に増加していった。すなわち、本会の設立の理念である「わが国の甲状腺外科のレベルアップ

と底辺の拡大」を達成することが出来たといえる。本検討会の大きな特徴は、発足当初から甲状腺、上皮小体を中心として、外科系医師、病理医、放射線科医たちが専門領域の枠を超えて互いに批判と評価を交わしながら共同で会を育ててきたという歴史である。疾患の診断、治療は言うまでもなく、病態を正しく把握するためにも病理学や放射線医学との共同作業は不可欠である。病理医は従来、統一的見解に乏しかった甲状腺腫瘍の良悪性の境界領域や病変の多様性などの問題に取り組み、現在の優れた病理組織分類を完成した。また、放射線科医は甲状腺、上皮小体疾患の診断と治療へのアイソトープの導入に尽力し、適切な臨床応用の基盤を確立した。また、日々進歩する放射線診断学の適用に多大の貢献をした。病理学、放射線医学と一体のこの体制が本会の発展の原動力になったことは紛れのない事実である。さらに、外科系医師は大別すると general surgery と head and neck surgery の二領域の医師によって構成され、異なった立場から提出される新しいアイデアや技術をお互いに吸収しあい、研鑽に努めてきた。細分化によって立場を異にする外科医たちが共同のテーマのもとに集まり、互いに切磋琢磨することこそ分化と統合の実践であって、本会の優れた特徴の一つである。

1974 年、UICC から甲状腺癌の TNM 分類が発表されたが、本会としてはこれにあきたらず、わが国の甲状腺癌の実体に見合った臨床所見の記載基準の確立を目指して委員会が結成された。1977 年には甲状腺癌取扱い規約(第 1 版)が作成、発表され、以後、UICC と歩調を合わせながら改訂の努力が重ねられてきた。1996 年には委員会の尽力により最新の第 5 版が刊行された。この取扱い規約の施行により国内外における甲状腺癌の意見交換は非常に容易になったことは会員一同の熟知するところである。また、この規約に準拠して甲状腺癌の全国登録が開始され、10 年間の集計結果の分析により、わが国の甲状腺癌の特徴が解明されたことは本会の大きな実績の一つである(Cancer 1992; 70:808–814)。

本学術集会における発表内容も年とともに大きく変化しつつある。当初は前述のごとく診断、治療など臨床的な問題を扱う演題が主体であったが、年々、研究的内容の演題が多くなり、最近は基礎医学的研究も含めて各時代の最新の課題に取り組んだ発表が目立つようになった。別表の特別講演、招待講演、教育講演などの演題名からもこれをうかがい知ることが出来る。すなわち、最近の甲状腺外科検討会は基礎から臨床に至るあらゆる斬新な課題を扱う高水準の学術集会に変貌した。

以上、甲状腺外科検討会は設立から 30 年を経て、会の規模、性格、発表の内容のみならず医学界における立場も大きく変化した。このような状況をふまえて本会の設立当初の名称が現在および今後の会の性格を表すのに適切であるかどうかとい

う問題が提起され、討議の結果、甲状腺外科研究会と名称を変更することとなった。会員のなかにはこの機に学会にすべきであるとの意見をもたれる方多かったが、準備その他の都合で今回は研究会への名称変更にとどめることになった。

本会の発足当初の理念と歴史的経過をふまえ、新しい時代に対応しつつ研鑽されることをお願い申しあげる。

甲状腺外科研究会前会長

飯田 太

1998年(平成10年)